

はじめに

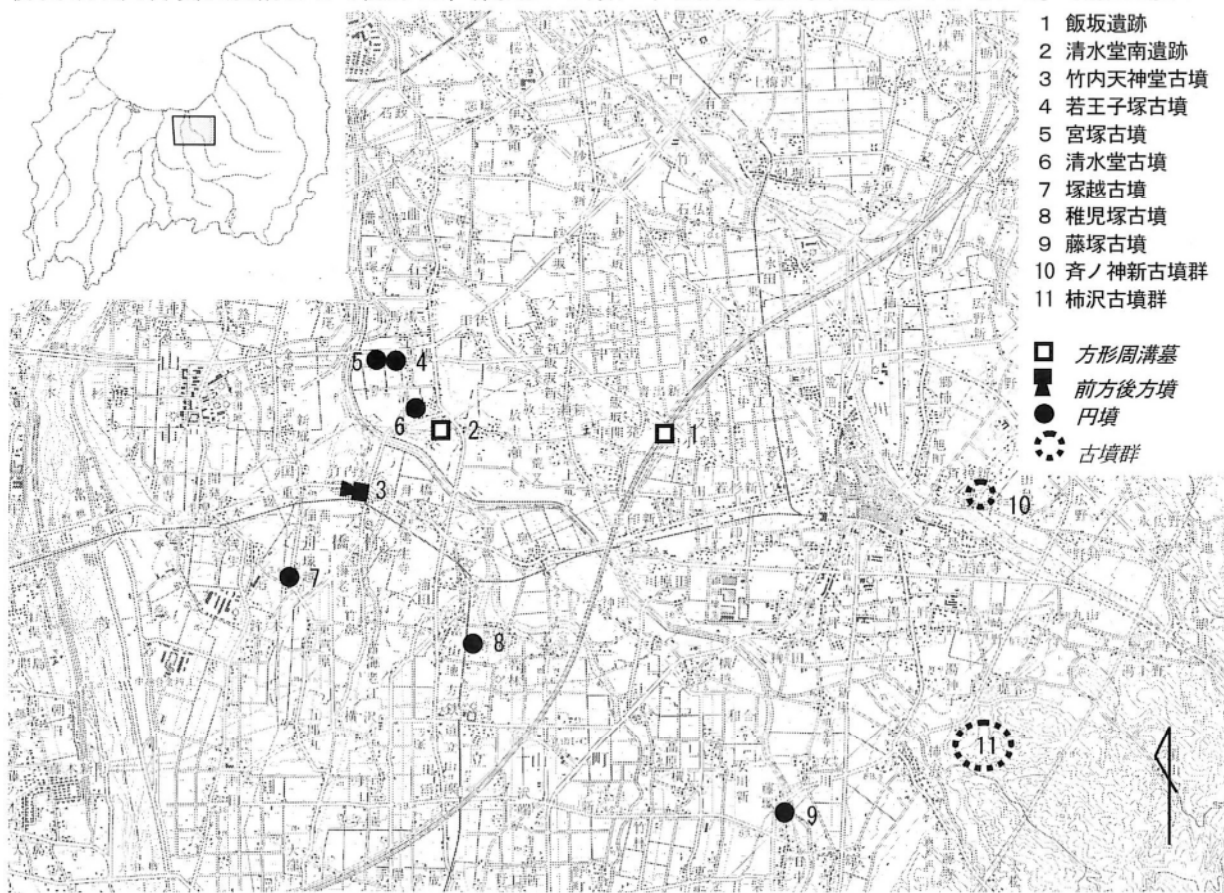
越中の古墳分布は、氷見・高岡地域など西部に圧倒的に多く、東部は少ない。こうしたなか東部で有力な首長墓が築かれる白岩川流域は稀有な地域である。ただ、古墳時代を通して安定した系譜があるのではなく、他地域同様に盛衰がある。ここでは白岩川流域の首長墓系譜が営まれた背景や他地域との関係について、古墳規模が相対的に大きくなる中期を中心に簡潔に見通しを述べたい。

1 白岩川流域の首長墓

最初に白岩川流域の首長墓について、先行研究を参照しながら確認しておく。

弥生後期から終末期に飯坂遺跡や清水堂南遺跡で方形周溝墓が築かれる。古墳時代前夜すでにこの地域に一定の勢力が存在したことを示す。飯坂遺跡の北東約 500mにある江上 A 遺跡では、掘立柱建物や環状溝を巡らす住居、柵、橋、水路等の遺構のほか、農耕具等の多量の木製品が出土した。江上 A 遺跡に近い中小泉遺跡では灌漑用水路内で水位流路調整のためのシガラミが発掘されている。両集落の墓域として、飯坂遺跡の方形周溝墓群が考えられる（上市町教育委員会 1981）。清水堂南遺跡も墓域の東側に土器や玉類を出土する溝等が検出されており、隣接して居住域が想定される（富山市教育委員会 2000）。これら集落は方形周溝墓を築く基盤であろう。

竹内天神堂古墳は、確定的ではないが前期の前方後方墳とみられている（池野 1984・岸本 1992 など）。小黒智久氏が指摘する 4 期（前方後円墳集成編年（広瀬 1991）による。以下同。）の築造ならば、後続する中期の円墳群の嚆矢となる首長墓といえるが、より古くなる可能性もある。越中では柳田布尾山古墳を別格として除けば、確実に 4 期に下る前方後方墳は確認できない⁽¹⁾。羽根丘陵の



第1図 白岩川流域の首長墓 (S=1/75,000)

勅使塚古墳、王塚古墳は論者によって見解が異なるが、いずれも4期には下らないようであるし、氷見地域の桜谷1号墳は3期とみられている⁹⁾。射水地域の五分一古墳も低平な前方部から古い段階に位置付けられるという(高橋 2007)。隣の能登でも雨の宮1号墳以外に4期の前方後方墳はみられないようである。こうした状況から竹内天神堂古墳が4期より古くなることも考えられる。

中期は大型円墳が継続的に築かれたとみられる。稚児塚古墳(46m)、若王子塚古墳(46m)をはじめ、清水堂古墳(30m)、塚越古墳(33m)、藤塚古墳(20m)などがある。若王子塚古墳に隣り合う宮塚古墳(25m以上)も現墳丘は方形だが、元は円墳だった可能性が有力視されている(高橋 2006a)。このなかで副葬品が判明している藤塚古墳は、鉄剣・鉄槍・方格規矩鏡を有し、小黒氏はその内容と須恵器がないことから中期前半の築造を推定する(小黒 2005)。その他は時期の判断が難しいが、他地域の状況からすると従来指摘されるとおり中期と考えるのが穏当であろう。

越中で最大規模の円墳が築かれ、前期とは変わって越中を代表する地域となる。なお、これらの円墳をすべて中期とし、なおかつすべてを時期差でとらえた場合、一系列の古墳にしては数が多いように思われる。若王子塚古墳、稚児塚古墳などを筆頭として、その下に20~30m級の円墳が従属する場合があったとするのが考えやすいのではないか。

このほか注目すべき古墳として、前期説と後期説がある柿沢古墳群や、7世紀前葉から中頃とされる齊ノ神新古墳群がある(藤田 2005)。柿沢古墳群が前期か後期かで見方が異なるが、現状で定見を持たないのでここでは触れないでおく。

2 首長墓が築かれた背景

古墳がある場所に立地する背景には、水稻農業等の生産基盤の安定性、交通の要衝に位置するという立地環境、政治的な要因等が複雑に絡む。そのなかで白岩川流域になぜ弥生後期から墳墓・古墳が築かれ続けたのであろうか。

呉羽丘陵の東に広がる富山平野は県内で最も広い面積を有し、神通川、常願寺川といった大河川が形成する扇状地や平野が発達する。なかでも白岩川流域を含む常願寺川水系が顕著である。一方、遺跡の形成からここが生活域として適していたことがうかがえる。武田健次郎氏が、富山平野における弥生時代・古墳時代・古代の遺跡の展開を分析したところによると(武田 1998)、弥生時代に最も遺跡が集中するのは、白岩川流域を含む常願寺川右岸の扇状地扇端部であることがわかる。また、それら遺跡の多くが古代まで継続し、安定した生産基盤があったとされる。弥生時代に複数の遺跡が所在する複雑化した社会が想定され、もともと飯坂遺跡や清水堂南遺跡の方形周溝墓のような上位階層の墳墓が出現する素地があったといえる。

これに対して越中東部で同じく弥生時代後期以降の墳墓が築かれる羽根丘陵はどうか。大野英子氏は、可耕地と灌漑水源など水稻農業に適した土地があったことを条件の一つとしてあげるとともに、水路・陸路による交通の利便性、高地性集落に適した急峻な丘陵の存在を重視している(大野 2007)。羽根丘陵は交通面、地理的環境面で他より適していたことが台頭の契機となった可能性が高く、外来の墓制である四隅突出型墳丘墓がこの地に存在することもそのことを物語る。

白岩川流域をはじめ常願寺川水系は、もともと社会が安定的に営まれるだけの生産基盤が存在し、それを背景に弥生時代後期以降の首長墓の系譜が成立したと考える。しかし、古墳時代前期に羽根丘陵と比べて劣位にあったのは、交通面や地理的環境面の要請に応えられた羽根丘陵が有利な位置にあったからであろう。そして前期とは一転して、ここが中期に越中を代表する地域になることは政治的な影響、おそらくは畿内政権との関係に変化が生じたためと考えられる。次では他地域との関係から白岩川流域の様相を検討したい。

3 他地域との関係

越中の他の地域と比較するとき、前期における白岩川流域は羽根丘陵や氷見地域ほど有力ではない。柿沢古墳群が前期に位置づけられるならば勢力図に再考を要するが、首長墓の規模からみて相対的に劣位に置かれることに変わりはないだろう。

中期は越中最大規模の円墳が築かれて、有力勢力に躍り出る。その出現の仕方は、前期古墳の在

り方にもよるが、空白地に突如出現したものではなく、弥生時代以来の首長墓が一部存在する場所に規模を拡大して出現するとみるべきだろう。では、なぜ中期に至ってこうした有力な系譜となったのか。

中期における円墳や帆立貝形古墳の増加については、かつて小野山節氏が前方後円墳の築造が規制を受けたことによると指摘した。畿内の大王墓が大きくなる時期に各地の古墳に規制がみられるとし、大王権力と各地の首長墓との関連を示したものである（小野山 1970）。その後、小野山氏の見解を都出比呂志氏が批判的に継承し、前方後円墳が規制を受けて一律に帆立貝形古墳や円墳になったのではなく、大王権力の政治変動に連動して各地の首長系譜に再編現象が起き、古墳の築造状況に変化が生じたとする（都出 1988・1999）。つまり、畿内政権の政治変動により、旧の畿内大王勢力と関係を有していた地域勢力は衰退し、逆に新しい畿内大王勢力に近い地域勢力が台頭するという現象が生じることを明らかにしたのである。

前期後半から中期にかけて、大王墓が奈良盆地北部から河内・和泉の古市・百舌鳥古墳群に移動する。畿内政権のこうした政治変動により畿内と越中の首長との関係も更新され、新しくてこ入れを受けた白岩川流域の首長が台頭したとみたい。須恵器の流通状況を検討した小黒氏によると、常願寺川・白岩川中流域の集落から TK216 または TK208～TK47 型式期の須恵器が出土し、陶器窯産を含むという（小黒 2003）。白岩川流域の被葬者が、陶器窯を傘下に抱える河内・和泉の政権との関係によって入手したとも考えられる。

では次に越中の他地域との関係に注目したい。白岩川流域と同等規模の円墳や帆立貝形古墳が氷見地域にもみられる。中期の可能性が考えられている主要なものを挙げると、稲積オオヤチ A1 号墳（帆立貝形古墳 46.5m）、上田 1 号墳（円墳 44m）、泉 1 号墳（円墳 43m）、泉 17 号墳（円墳 35m）、朝日寺山 1 号墳（円墳 38～40m）などがある。このほか規模は小さいが、イヨダノヤマ 3 号墳（円墳 20.5m）、加納南 9 号墳（円墳 19m）はそれぞれ横剥板鋌留短甲、挂甲が出土している。氷見地域では前期から後期まで大規模な首長墓が築かれ、その背景には海や潟湖が重要な役割を果たしたと考えられている（藤田 1983・高橋 2007）。

注意されるのは、円墳で最大規模の上田 1 号墳や泉 1 号墳の規模が、白岩川流域の若王子塚古墳（46m）や稚児塚古墳（46m）に近いことである。誤差を考えればほぼ同じといってもよいかもしれない。また、両地域に同規模の円墳が 2 基ずつ築かれていることも注意されるところである。それぞれの地域で自律的に規模が決められたというより、外的な要因によってこうした現象が生じたとする方が考えやすい。とはいえ、稚児塚古墳は段築・葺石が伴うのに対し、氷見地域の円墳には伴わないので墳丘総体としてみると違いがあるという指摘があるかもしれない。しかし、平野に位置して川が近い稚児塚古墳と丘陵上にある氷見地域の古墳では葺石石材の獲得のしやすさが異なるし、段築も盛土の質による崩落のしやすさという墳丘構築上の違いに起因していることも想定できる。したがって、そうした違いを強調するよりも、上述したように 45m 前後を規範とするような古墳が東西に立地しているという現象を重視したいと思う⁽³⁾。

中期の越中は、氷見地域と白岩川流域の勢力が最有力であったとみられる。柳田布尾山古墳が他を圧倒する規模で築造された時代から、越中の東西に二勢力が並ぶ時代へ転換する。「大首長墳を頂点とする連合体制が、地域単位に分断されていく形をとって、畿内政権による地域支配が拡充していった」（高橋 2007）のであろう。しかし、中期後半頃からは氷見地域がより重視されたと推測される。イヨダノヤマ 3 号墳、加納南 9 号墳など 20m 前後の円墳から短甲、挂甲が出土しているのは、畿内政権がより小さい古墳の被葬者までを取り込むため積極的な関与に乗り出したことを意味している。このとき白岩川流域勢力は相対的にその位置付けは低く置かれたと考えられる。

おわりに

河内・和泉を中心とする中期の畿内政権が、元々安定した生産基盤があった白岩川流域の勢力を後押しすることで大規模円墳を築く首長が台頭し、一定期間氷見地域の勢力と同等の勢力を誇るも、中期後半以降、徐々に氷見地域が重視されるなかで相対的にその位置付けは低くおさえられたという筋書きを示した。

越中の中期と目されている円墳の多くは発掘調査がなされていないため、時期は古墳そのものからでなく周辺の状況から類推されており、不確定な所もあると思う。紙幅の関係から図をほとんど掲載せず、説明を省略した所もあるが、大筋で以上のように考えている。今後別に補いたい。

注

(1) 趣旨から外れるが、柳田布尾山古墳については次のように考えている。

高橋浩二氏は、柳田布尾山古墳が能登の雨の宮 1 号墳との直接的な関係によって成立したとし、雨の宮 1 号墳に近い時期を想定している（高橋 2006b・2007）。伊藤雅文氏は雨の宮 1 号墳を 4 期とし、さらに伊藤氏は「前方後円墳にかわる最後の前方後方墳」、「埋葬施設や副葬品に畿内王権との密接な結びつきを示しながら、墳形は伝統的な首長墳としての前方後方墳を採用していることが重要」とする（伊藤 2006）。雨の宮 1 号墳との関係が深い柳田布尾山古墳も同様の性格を推測でき、畿内との関係が想定される有力前方後方墳として特別視されることから、他の前方後方墳とは明確に区別される。

(2) 桜谷 1 号墳については、最近、藤田富士夫氏が前方後円墳で 2 期に遡るという見解を示している（藤田 2010）。

(3) 帆立貝形の稲積オオヤチ A 1 号墳も 46.5m という規模であるが、これは前方部を含めた全長であり、後円部径だけでは約 36m である。そのため上述の円墳と同じ基準では扱えないが、円墳の径とほぼ同規模であることに何らかの意図があるように読み取るのは穿ちすぎであろうか。

引用・参考文献

- 池野正男 1984 「竹内天神堂古墳」『昭和 58 年度富山県埋蔵文化財調査一覧』富山県教育委員会
- 伊藤雅文 2006 「能登における古墳築造の展開と問題点」平成 17 年度富山大学人文学部公開研究会『北陸の古墳編年の再検討』富山大学人文学部考古学研究室
- 大野英子 2007 『王塚・千坊山遺跡群－富山平野の弥生墳丘墓と古墳群－』同成社
- 小黒智久 2003 「越中東部地域における初期須恵器」『富山市考古資料館報』No.40 富山市考古資料館
- 小黒智久 2005 「古墳時代後期の越中における地域勢力の動向」『大境』第 25 号 富山考古学会
- 小黒智久 2006 「越中における古墳編年」平成 17 年度富山大学人文学部公開研究会『北陸の古墳編年の再検討』富山大学人文学部考古学研究室
- 小黒智久 2007 「勅使塚古墳と王塚古墳」『大境』第 27 号 富山考古学会
- 小野山節 1970 「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第 16 巻第 3 号 考古学研究会
- 上市町教育委員会 1918 『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町遺構編－』
- 岸本雅敏 1992 「越中」『前方後円墳集成』中部編 山川出版社
- 高橋浩二 2006a 「富山市宮塚古墳の測量調査成果」『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』富山市教育委員会
- 高橋浩二 2006b 「北陸の前方後方墳－柳田布尾山古墳の時期的評価をめぐって－」『石川考古学研究会々誌』第 49 号 石川考古学研究会
- 高橋浩二 2007 『富山の古墳－氷見・雨晴の首長と日本海－』富山県・日本海学推進機構
- 武田健次郎 1998 「富山平野における遺跡群の展開」『富山考古学研究』創刊号（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 都出比呂志 1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』第 22 号 大阪大学文学部
- 都出比呂志 1999 「首長系譜変動パターン論序説」『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』大阪大学文学部
- 富山市教育委員会 2000 『清水堂南遺跡』
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社
- 藤田富士夫 1983 『日本の古代遺跡 13 富山』保育社
- 藤田富士夫 2005 「上市町の先史」『新上市町誌』上市町
- 藤田富士夫 2010 「国指定史跡桜谷 1 号・2 号墳の墳形とその意義について」『芙蓉峰の考古学－池上悟先生還暦記念論文集－』六一書房